

本を書くということ

奥田 のぞみ

私は、学術書とか専門書とか呼ばれる本を手がける出版社に勤めている。著者のほとんどが研究者である。私も同僚も、自分が企画する本のほかに日々たくさんの原稿を読む。あちこちの大学で出版助成制度ができてから、その量は増える一方だ。そして最近、「この人はなぜこれを書きたかったのかなあ」と思うことがよくあるような気がする。

大学や文科省から研究業績を出すよう教員がプレッシャーをかけられていることも、学位論文を本にしないと若者が就職しづらいことも、重々承知はしている。だが、全体の3分の1を先行研究の紹介が占めたり、1章に100個以上注が付いたり、参考文献一覧が長々あったりと膨大な情報を詰め込んだ原稿がほんとうに多いのだが、そうしたものにはたいてい著者のこれが言いたかったということがどこにも出てこない（論文集はもっと悲惨な状況なので、今回は単著に話を限定する）。

自著を出版したいのだがと相談に来られたある先生は、でも自分の本を理解できるのは日本全国で10人くらいしかいませんけどね、とにっこりおっしゃった。じゃあ、10部コピーして配ればいいんじゃないですかと心の中でつぶやいたものである。私が

この発言にカチンときたのは、そんな売れそうもない本は出す意味がないと思ったからではない（売れそうもない本なら自慢できるほど出している）。この先生は本を出したいのかもしれないが、本を書きたかったわけではないと感じたからだ。

本を読む理由は、人によって千差万別だろう。過去の出来事を知りたい、現在の状況をよく理解したい、他の人の考えを参考にしたいとか、あの人が勧めているから、著者が好きだから、装幀が気に入ったから読む人もいるかもしれない。けれど、日記やブログではなく、定価の付いた本を書く理由は、つきつめれば一つだけではないだろうか。自分の名の責任において、自分の考えを世の中の人に伝えるためである。

体裁はきれいに整っているが、どこにもでっぴりのない、全体にのっぺりした印象の本が増えてきたのは、思えば「中立」や「客観性」を強調する研究者や編集者の登場と軌を一にしている。私は歴史編集者の勉強会に入っているのだが、そこで10年ほど前に30代の男性が言ったことが忘れられない。その人は、自分は中立で客観的でありたいから、関ヶ原の戦いもアジア太平洋戦争も同じ距離感で捉える本を出していきたいと言ったのだ。かなりびっくりした

が、いまではこういう編集者も研究者も珍しくはない。マルクス主義史観に対し、「暑苦しい」「ウェット」「ロマン盛りすぎ」と反発する傾向が若手の間で見られるのと、それは無関係ではない。網野善彦を「レフティ」「日本が嫌いなのに日本史を研究するのか」とSNSで揶揄していま話題の方々も、そうした一人なのかもしれない。

心理学者の信田さよ子さんは、DV被害者の告白が信用されないという問題について、中立の立場で客観的に聞こうと思うと嘘に聞こえてくると言う。「中立や客観って、マジョリティの立場に立つことなんですよ。それは強者の眼差しなんです」。だから彼女は、「客観的」という言葉をほとんど使わないそうだ (<https://cakes.mu/posts/32991>)。これはDV被害者だけでなく、さまざまなこと言えるのではないだろうか。そういえば、中立・客観性を強調する編集者も研究者も、みな日本人で男性で高学歴の人だった。

みずからの立ち位置に無自覚なまま、中立性を謳って批判も主張もせず、ただ題材を美しく処理した本は、誰に何を伝えたいのだろうか。指導教官や研究仲間の顔だけを思い浮かべて原稿を書いているのだろうか。何も主張しなくてすむのは、マジョリティの特権であることに気づいているのだろうか。

私は本を書く人に、安全圏にいないでもっと冒険してほしい。注番号がずれていても、出典の表記がそろってなくても、出来事の年代や人名が違っていても、たいした問題ではない。それは私が確認するか

ら、著者には著者にしかできないことをしてほしい。映画業界で次世代の新しい才能に贈られる大島渚賞というのがあるが、第2回は該当者なしに終わった。審査員の一人である映画監督・黒沢清が出したコメントに、業界は異なるが私も共感する。「いろいろあったけど、よかったよかった」となる映画が多すぎる。……あなたがささやかに打ち込んだクサビは、案外強力なのだ。よかったよかったと辻褃を合わせる必要なんかどこにもない」 (<https://natalie.mu/eiga/news/417753>)。

本は刊行されると、著者や編集者の手を離れてひとりで世界に出て行く。書店でまったく面識のない人が買ってくれるかもしれない。20年後にどこかの図書館で誰かが読むかもしれない。30年後に古本屋で誰かが手に取るかもしれない。そして、もしかしたら共感してくれるかもしれない。一生の間に人が書ける冊数は限られているから、見も知らぬ人とその本を通じてつながることは一種の奇跡ではないだろうか。こんなこと言うと、また「暑苦しい」と言われるだろうけど。